令和 6年 2月

川崎市立麻生小学校

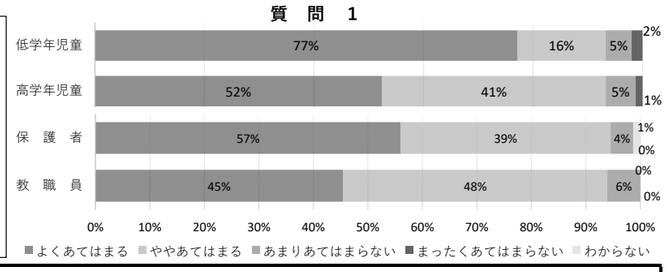
令和５年度　学校評価「元気の出る学校づくりに向けて」アンケート結果

《学校評価について》
　今年度も「元気の出る学校づくりに向けて」アンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。このアンケート調査は、児童・保護者・教師の三者にアンケートを取り、その傾向を分析することで、学校教育をよりよいものにしていこうとするのが主な目的です。
　また、結果の分析は、職員だけでなく麻生中学校区学校運営協議会でもご意見をいただきまとめました。アンケート項目は、今年度も学校教育の重点に合わせて見直し、アンケートをとった12月までの取組みを振り返っています。
　このアンケートは学校教育の一部分を表し、アンケートで調査できていない部分も多分にあります。今後の本校の方向性を知る一つの指標としてご活用いただければ幸いです。

※アンケートの回答は、児童が「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の四択、保護者、教職員は「わからない」が加わり五択となっています。

質問１　について

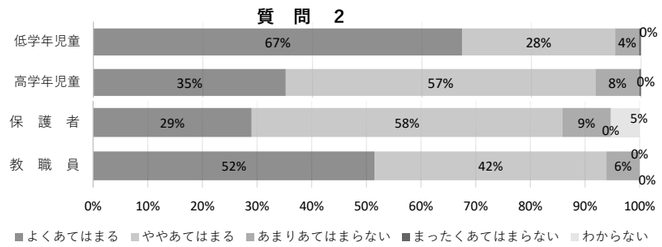
低学年	友だちと力をあわせて、うんどうかいなどのぎょうじにさんかしています。
高学年	与えられた役割を果たし、友だちと協力して、学年や学校の行事に積極的に参加しています。
保護者	お子さんは、与えられた役割を果たし、友だちと協力して学年や学校の行事に積極的に参加している。
教職員	子どもたちが集団の中で折り合いをつけたりリーダーシップを学んだりする機会となるように学年や学校の行事を計画・運営・指導している。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を合わせると、93%の児童が自分の役割を果たそうとしていたり行事に意欲的に参加したりしている。学校目標達成のために、一定の成果が出ていることがわかる。高学年は今後も、委員会、クラブなど学校の中心として活動することで、集団への帰属感、自己有用感をもたせていきたい。また、引き続き、児童が目標をもって活動に参加できるように、工夫が必要だと考える。

質問２　について

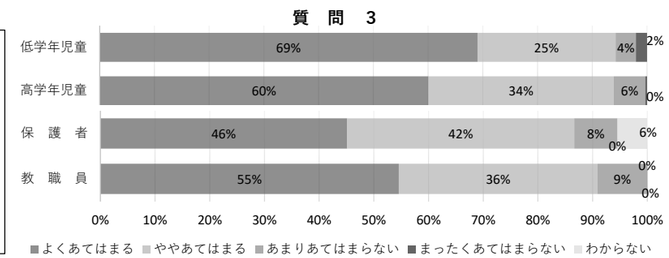
低学年	学校生かつの中で、よりよくなろうとしています。
高学年	学校生活をふり返り、よかった点や見直す点を明らかにし、次の行動に生かしていますか。
保護者	お子さんは、学校生活を振り返り、次の行動に生かしている。
教職員	子どもが学校生活を振り返り、自分の課題を適切にとらえ、前向きに行動できるよう指導・支援している。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が、低学年95%、高学年92%となっているが、高学年児童の「よくあてはまる」の割合は少ない。高学年になると自分に対する評価が厳しくなる傾向があるので、お互いに認め合ったり褒め言葉を伝えたりする機会を多くして、自信につなげたいと考える。また、キャリア教育を充実させ、目標をもって活動し、自分の成長を振り返る活動に今後も意識して取り組む必要がある。児童が成長の価値づけをできる場を増やしていきたい。

質問３　について

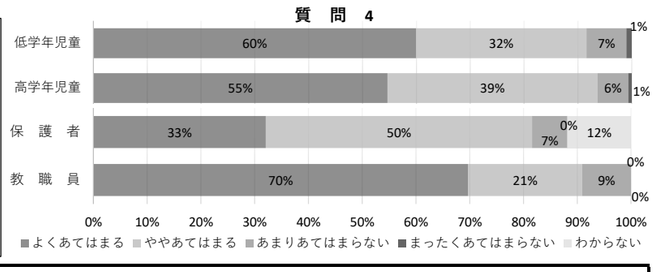
低学年	じぶんからすすんでかかりやとうばんのしごとをしています。
高学年	気持ちのよい環境づくりのために、係やクラブ、委員会等の活動内容を考え行動しています。
保護者	お子さんは係やクラブ、委員会等といった学校生活の様々な場面で主体的に活動している。
教職員	子どもが主体的に計画し活動ができるよう、時間や場所、活動の機会などを保障している。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が、低学年、高学年ともに94%と多い。引き続き、児童の主体性を引き出すような活動を工夫できる場や時間を確保したり、児童の取り組んだことを認め自信や意欲につなげたりしていきたい。低学年、高学年ともに6%の児童が「まったく・あまりあてはまらない」としているので、教員も児童一人一人の働きを認める機会を設定し、価値づけしていくことが大切である。

質問４　について

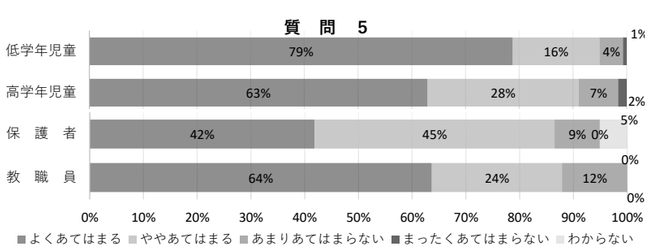
低学年	友だちがかなしむことはせず、いじめを見かけたらたすけようとしています。
高学年	友だちが悲しむことをせず、いじめを見かけたらそのままにしないで何らかの行動をとろうとしています。
保護者	お子さんは、いじめを見かけたらそのままにせず、何らかの行動がとれている。
教職員	いじめを許さない学級の風土づくりに努め、いじめが起こらないよう、児童の情報を教職員間で共有し指導・支援を行っている。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が、低学年は92%、高学年は94%いる。人が悲しむことはあまりせず、思いやりがある児童が多いということが言える。ただ、「まったく・あまりあてはまらない」を選んだ児童も低学年で８%、高学年で７%いることから、いじめの場面を見たときに積極的に行動する自信がなかったり、どう行動していいかわからなかったりする児童もいることが予想される。今後も道徳や共生共育などの時間を利用して「いじめをしない」という指導を繰り返すとともに、いじめを見かけたときの対処の仕方などを示していくことが大切だと考える。情報を共有し、学年、学校全体で協力しながら「いじめのない学級・学校」を作っていきたい。

質問５　について

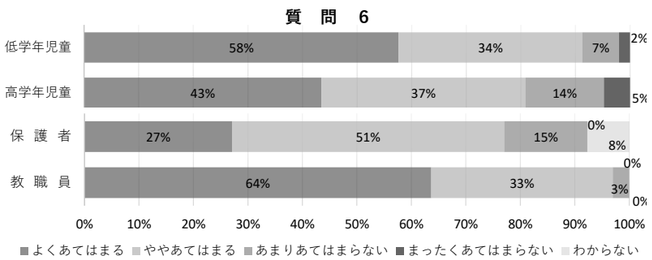
低学年	いろいろな友だちとなかよくしています。
高学年	様々な考え方や立場の人たちがいることを理解し、だれとでも仲よく過ごそうとしています。
保護者	お子さんは、様々な考え方や立場の人たちがいることを理解し、だれとでも仲よく過ごしている。
教職員	他者との多様なかかわりの機会を設定し、協力して学校生活を送れるように指導・支援している。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を選んだ児童は低学年で95%、高学年91%いる。一方で「まったく・あまりあてはまらない」が低学年5%、高学年9%いた。質問の「いろいろな友だち」や「だれとでも」という表現にひっかかり、「あまり・まったくあてはまらない」を選ぶ児童もいたように考える。誰とでも一緒に遊ぶということだけではなく、グループ活動など協力すべき場面で、誰とでも仲良くできたらよいと考える。今後も席の配慮をしたり、ペアやグループ活動を設定したりするなど、友達関係を広げ友達のよさに気づく工夫をしていく必要がある。また、地域教育会議の中で「挨拶の大切さ」が話題になった。コロナ禍の影響もあってか、以前に比べると挨拶をすることに消極的な様子が見られるのではとのお声をいただいた。校内はもちろんのこと、地域の方々とも気持ちのよい挨拶が交わせるように、児童と共に考えていきたい。

質問６　について

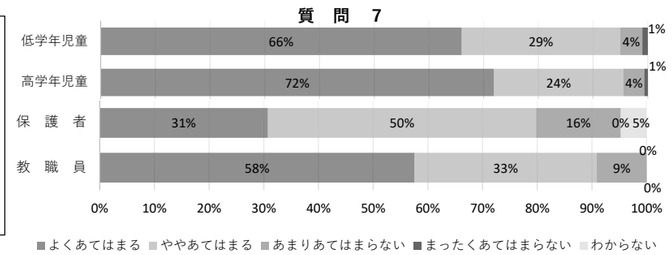
低学年	じぶんにはよいところがあると思います。
高学年	自分にはよいところがあると思います。
保護者	お子さんは自分のよいところがわかっている。
教職員	一人ひとりに寄り添い子どもたちのよさを認め、自尊感情が高まるよう、指導・支援をしている。



◆分析と今後の方向性
　「よく・ややあてはまる」を選んだ児童は低学年92%、高学年80%いるが、「まったく・あまりあてはまらない」を選んでいる自信をもてないと思われる児童が、他の質問項目に比べて、低学年9%、高学年19%と特に高学年は多い。一人ひとりに寄り添いながら、友達同士が互いの言動を認め合う機会を積極的に設定したり、大人が具体的な言葉で児童を褒める声かけをしたりしながら、児童のよさを認め自己肯定感を高めていきたい。

質問７　について

低学年	学校でべんきょうしたことがよくわかります。学校の授業の内容がよくわかります。
高学年	学校の授業の内容がよくわかります。
保護者	お子さんは、学習したことが分かっている。
教職員	体験授業や少人数などといった授業形態を工夫して、子どもたちが学習内容を理解できるように指導・支援している。

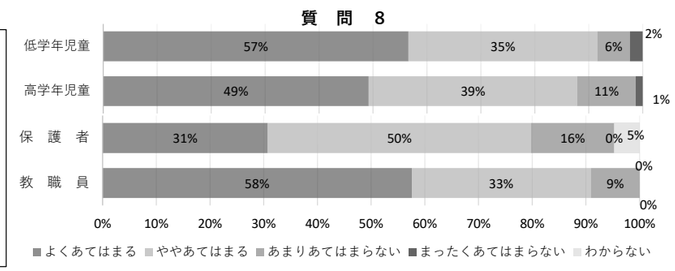


◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が、低学年も高学年もが９５%となり学習内容がわかっていると思っている児童が多いことが分かる。「よくあてはまる」の割合も他の質問に比べて高い結果が出ている。授業内容や授業展開の工夫など、学校教育目標達成に向けての今年度の取り組みは概ね成果があったといえる。一方で「よくあてはまる」を選んだ保護者は３８%、教職員は５５%と割合が低くなり、児童と保護者・教職員の間で「わかる・できる」の捉えが違っていることや保護者や教職員が児童の可能性にさらに期待していることが考えらる。来年度に向けて、体験学習や少人数などの授業形態を工夫し、児童一人ひとりが「できた・わかった・楽しい」と思える授業作りを進めていきたい。

質問8　について

低学年	じゅぎょうで思ったことをはなしたり、友だちのかんがえをきいたりしています。
高学年	授業で、自分の考えを伝え合ったり、話し合いを通して自分の考えを深めたりしています。
保護者	お子さんは進んで自分の考えを伝え合ったりまとめたりしている。
教職員	思考力・判断力・表現力・コミュニケーション力等の育成を目指し、カリキュラムを工夫している。

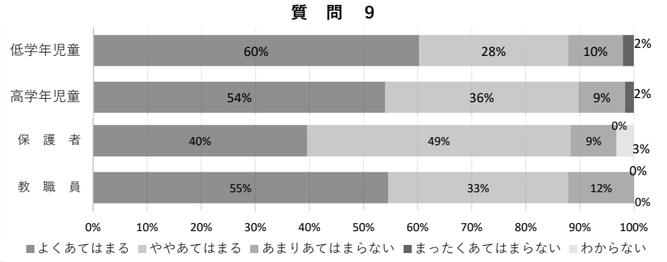


◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が低学年は９２%、高学年は８８%いて、友だちとコミュニケーションを互いに取りながら授業に参加していると考えていることが分かる。ただ「よくあてはまる」と回答した児童の割合は５０%前後となり、質問７に比べてもその割合は低くなり、高学年になるにつれて表現力やコミュニケーション力に自信がなくなってきていることが窺える。来年度に向けて、自分の考えを主体的に深めていける対話型の学習を積極的に取り入れるなど、「よくあてはまる」の割合が更に増えるよう、授業改善は進めていく必要があると考えている。「子ども」を主役にした授業の工夫を行っていきたい。

質問9　について

低学年	わからないことやしりたいことを先生や友だち、家の人に聞いています。
高学年	学校の授業では、進んで周囲の人と話合いながら課題を解決しようとしています。
保護者	お子さんは、周囲の人と関わりながら学校の授業に主体的に取り組んでいる。
教職員	子どもたちが主体的に課題を発見し周囲の人と関わりながら問題解決できるよう、授業を工夫している。

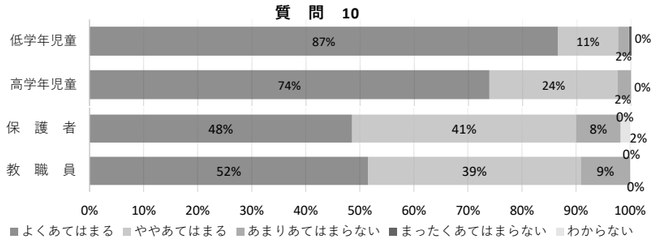


◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を選んだ児童が低学年は８８%、高学年は９１%いて、主体的に人と関わり問題解決をしていると考えていることがわかる。高学年の方が困ったときの対処法を知っているということもいえる。一方で、困ったときの対処方法がわからずにいる児童が低学年で１２%、高学年で１１%いることに注目していく必要はある。来年度に向けて、児童一人ひとりが学習における困り感を教職員や保護者、児童間で共有しやすい授業や学級風土とはどのようなものかを考え、環境を整えていきたい。また、授業の中で様々な問題解決の方法があることを学び、適切な方法を選択していけるよう、授業改善に取り組んでいきたい。

質問１０　について

低学年	きまりをまもってギガたんまつをつかっています。
高学年	授業や学校生活の中で、きまりを守ってギガたんまつを有効活用しています。
保護者	お子さんはきまりを守って GIGA 端末を活用し、学習や生活に役立てている。
教職員	情報活用能力を身に付けるために、 GIGA端末を有効に活用し、適宜、情報モラル指導を行っている。

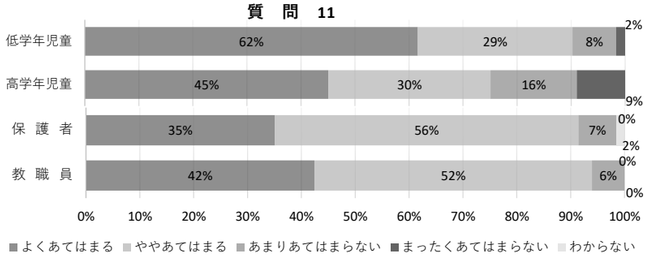


◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を選んだ児童は、低学年、高学年共に９８%いて、GIGA端末をきまりを守って活用していると考えていることが分かる。GIGA端末の使い方やルールなどがわかり、安心して使えている様子が窺える。来年度以降もGIGA端末の正しい使い方やマナー、ルールについては継続して指導していきたいと考えている。今後、GIGA端末を有効に活用することで、基礎学力の定着を図ったり、授業形態の工夫ができたりと様々な可能性が広がることが予想されるので、教職員同士の情報共有や研修も行い、GIGA端末の有効な活用を更に考えていきたい。

質問１１　について

低学年	こまったことがあるときには、おうちの人やせんせいなどのみぢかな人にはなそうと思います。
高学年	悩みや困りごとがある時は、親や先生などの身近な大人に相談しようと思います。
保護者	学校だよりや個人面談、懇談会等を通してお子さんの様子を共有し、学校と連携しながらお子さんを育てている。
教職員	学校だよりや個人面談、懇談会等を通して教育活動について共有し、保護者と協力、連携しながら子どもの

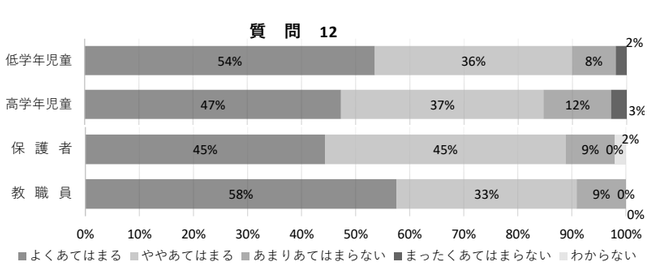


◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を選んだ児童は、低学年は９１%、高学年は７５%となり、全体としては、目標を達成していると言える。一方で、「まったく・あまりあてはまらない」を選んだ児童は、低学年では１０%だが、高学年では２５%と増加している。これは、年齢が上がるにつれ自分で解決したり、友達に相談したりする場合が増えると同時に、大人への相談をためらう傾向にあるといえる。学校と保護者では、お子さんの様子を共有することができているので、引き続き連携体制を強化しながら子どもたちの困り感に寄り添っていきたい。

質問１２　について

低学年	よく食べたりよくうんどうしたりしてまいにち生き生きとすごしている。
高学年	毎日を生き生きと過ごすために、心と身体の健康を保つ方法を知り、実践している。
保護者	お子さんは、毎日生き生きと生活するために、心の健康を維持し体力を向上させようと努めている。
教職員	特活や保健体育、キラキラタイムなどを活用して、心身の健康の維持、体力の向上を目指し授業の実践をしている。

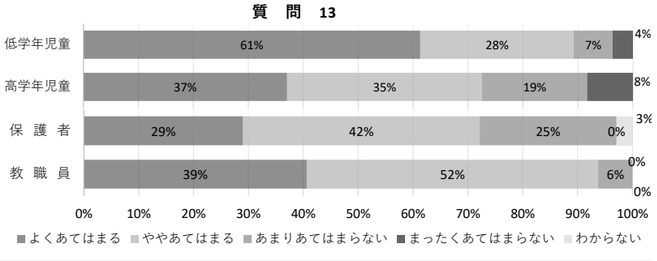


◆分析と今後の方向性

「よくあてはまる・ややあてはまる」を合わせると低学年は９０%、高学年は８４%と全体としては、目標を達成しているといえる。また、保護者の割合も９０%と高い。これは、地域には整備された公園が多く、放課後の校庭開放やキラキラタイムなどの学校での取り組みも成果を上げているといえる。一方で「まったく・あまりあてはまらない」の割合が、高学年になるにつれ増えているのは、放課後の過ごし方の変化が背景にあると思われる。これらの現状を保護者の皆さまと共有しつつ、子どもたちの心身の健康の維持、体力の向上に努めたい。

質問１３　について

低学年	学校やすんでいるちいきのよいところをしっています。
高学年	学校や住んでいる地域のよさを知っています。
保護者	お子さんは、学校や住んでいる地域に愛着をもって生活している。
教職員	学校や地域に愛着がもてるような指導や外部人材や地域を扱うなどカリキュラムの工夫をしている。



◆分析と今後の方向性

「よく・ややあてはまる」を合わせると低学年は８９%だが、高学年は７２%と下がっている。また、保護者の方も７１%となっている。原因としては、コロナ禍の影響で、外出自粛や地域行事が実施されなかったことなどが考えられる。低学年では、学区探検や大根栽培などを通して、学習の中で地域の方と触れ合う機会を多く設けているが、高学年になると、４年生でのニヶ領用水や５年生の稲作などの学習があるものの、地域として捉えづらいことが考えられる。学区だけではなく麻生区、川崎市といった広い意味での地域として捉えられるように周知を図る必要がある。学校運営協議会でも、今後、地域のお祭りなどの運営に子ども達が関わっていったり、コロナ禍以前に実施していた「子ども会議」を復活したりしていきたいというお声をいただいている。どのような形で実現していけるか検討していきたい。